

幸せな短歌ライフのために 小林賢太

砂子屋書房のWebサイトで連載の「月のコラム」、今年の担当は高良真実氏である。どれも面白いが、二月の「短歌の神様はどこにいるのか」を特に興味深く読んだ。例えば、読んでおくべき秀歌リストのようなもの（やや大仰に言えば「正典」）が歌壇で共有されていること、それによって短歌の共同体は成立していること、そして共同体の中で誰かが自分の歌を読んでくれるという信頼があると、賞への焦燥や他者への嫉妬など短歌の毒から距離を置くことなど、考えさせられる指摘が多かった。短歌雑誌の特集等で結社の意義や役割が話題になることもあるが、高良氏の先の指摘はそれに対する的を射た答えだろう。とはいえ氏は共同体を無批判に賞賛しているわけではなく、負の側面にも言及している。この十年で短歌を始める人は増えたが、短歌の共同体から疎外された人も増えているのではないかとという指摘は鋭い。

短歌は一人でも作れるが、おそらく一人では続かない。誰かの歌を読み、誰かに自分の歌を読んでもらうことで、作り続けることができるように思う。そうした相互関係を生み出す場として、結社やそれに類する集団が提供する歌会や歌誌は存在してきたし、近年ではインタネットやSNSが新たな場として機能している。歌人が他者を求めるのは、現代に限ったことではない。

漂泊の歌人として名高い西行は、公的な歌合には参加せず、

中央歌壇とは一定の距離を取りながら己の歌の道を邁進していった。しかし晩年、勅撰和歌集への入集を望んで藤原俊成に詠草を送ったり（山家集・一二三九番）、俊成・定家親子に自詠の批評を求めたりしている（御裳濯河歌合、宮河歌合）。その心境を西行研究者の寺澤行忠氏は、「生涯かけて精進を続けてきた詩的達成について、歌壇に対して、いわばその確認を求めた行為だったのではなからうか」と推測している（『西行 歌と旅と人生』新潮社、二〇二四年）。西行ほどの歌人でさえ、共同体と無関係ではいられなかったと言えよう。

他方、共同体とは一種の幻想でもある。吉本隆明『共同幻想論』やベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』などがそれを示している。しかも歌壇や文壇といった共同体は、国家における国土のような物理的実体を有しているわけでもない。構成する人々、共有する概念、そこに抱く信頼が拠り所である。何とも頼りないようだが、短歌の共同体が未だ減びていないのは、色々ありながらも人々が繋がりを求めているからだだろう。次の一首は、勅撰集入集を望んだ西行が、詠草に添えて俊成に贈った歌である。

・花ならぬ言の葉なれどおのづから色もやあると君拾はなむ
（つまらない歌ばかりですが、もしかすると良い歌もあるかもしれない）

結句にわざわざ置かれた「君」という一語は、俊成への信頼だけでなく、他者を求める心の表出かもしれない。誰かの歌を読む、そして誰かが自分の歌を読んでもらっていると思えることは、きっと短歌ライフを幸せなものにしてくれるのだろう。